

「空中ブランコ乗りのキキ」に於ける 教材解釈に基づいた発問の研究

松 田 典 祀

序

常日頃、研究授業を参観するたびに疑問に思っていたことが、「発問」に於ける見通しのない投げかけと、それに対する生徒の発言への無責任な放置である。本来、この二つは相互に関連しながら、奥行きのある思考のせり上がり成し遂げ、もって生徒の思考上の論理的発展を促す土台として成立するものである。しかしながら、近年の文学的文章の読み取り軽視の風潮は、学校現場に於いて、ディベート力やプレゼンテーション力の養成と反比例しながら衰亡の一途を辿っている感がある。

読み取りに於いては、何と言っても自由といった妙な信仰のもとに、教師の教材解釈力は、その研究心の欠落を伴って、適度で、他人まかせとなり、ひいては、生徒にもそれが常識として蔓延し、そのままの形で、現在の大学生はおろか、一般の教員にまで及んでいる傾向が見られる。

本研究は、こうした現状を踏まえ、解釈の奥行きに迫る「発問の摘出」と発言予想を基盤に据えた授業の方向性を、三省堂教科書一年教材「空中ブランコ乗りのキキ」に基づいて追究していくことを目的とする。もって、学生諸君の教材解釈力の涵養の一助となれば幸甚である。

なお、記述の方法としては、初発感想である「一次読み」に対して、「二次読み」と言われる方法に基づき、参考文献ならびに先行授業実践資料（ともに、本稿末に、参考資料として提示）をもヒントに取り入れて、教師（この場合は筆者）の授業の構築を述べたものである。

目 次

序	141
I 「空中ブランコ乗りのキキ」の二次読み	142
(I) 第一場面	142
(II) 第二場面	150
(III) 第三場面	157
(IV) 第四場面	170
II 発問摘出	183
III 「生徒に期待できるもの」への見解	188
結	189

I 「空中ブランコ乗りのキキ」の二次読み

(I) 第一場面 幸福なキキの不安

指導目標

三回宙返りの人気の中で、いつも幸福だったが、いつか誰かが飛ぶのではないかという心配と、団長からの期待の重さに悩んでいたキキの不安定な心情を読み取る。

— 観客からのキキの評価と、観客の知らないキキの心配 —

〈概括した解釈〉

観客の視点からキキは幸福の絶頂であったはずであるが、キキの視点からすると、他の人が三回宙返りをすると、という心配もかすめていた。

〈本文〉

- | |
|--|
| 1 そのサーカスでいちばん人気があったのは、なんといっても空中ブランコ乗りのキキでした。 |
|--|

〈解釈〉

いちばん人気が — 人気とは相対的な概念であり、したがって、いちばんと

いう順序を表わすことばが用いられているが、ここに相対的な価値と、絶対的な価値との比較を考える示唆がまず登場する。さらに、それも、「その」サーカスであって、「その」という指示語の働きは、固有名詞化する必要のないこと、したがって、一般普遍性に還元可能な事柄であることを示唆していると考えることができる。さらに、こうした冒頭の語りは、まさに、客観的に「書き手」が作中に入らずに、「語っている」物語としての手法をとっていることから、一種の童話的な寓話を示すであろうことを感じさせる。そしてそのことから、この物語は、過去に於ける一地方の伝聞・伝承物語的性格を帯びていることを忘れてはならない。

その … ある特別なところ。どこにでもあるできごとの常套句。

サーカス … 非日常性，安全・安定の対極。

キキ … 喜々（肯定的な面），危機（否定的な面）

なんといっても … （なによりも）人気の高さを強調している。

いちばん … 相対的価値⇔絶対的価値

空中ブランコ乗り（をしてこそ）のキキでした。（今はそうでもない）

〈語り手の視点〉

〈発問1〉サーカスでキキは誰にでもちやほやされ、羨望されている存在であったようですが、そうした人気というものに対して、あなたはどのように考えますか。（初発感想）

→ 人生にそれほど影響を与えないものだと思っている。

〈発問2〉この物語は、いつ、どこのだんな話として、誰が語っているのですか。（あらすじ・構成・視点・伝承の問題）

〈発問3〉いちばん人気とありますが、他の種目はどんな感動を与えていたのでしょうか。

→ 恐怖・驚き・焦燥・興奮・いやし・緊張を与える。（作品理解の予備的知識）

〈本 文〉

2 サーカスの、大テントの見上げるように高い所を、こちらのブランコからあちらのブランコへ、三回宙返りをしながらキキが飛ぶと、テントにぎっしりいっぱい観客は、いつも割れるような拍手をします。

〈観客の視点〉

〈解 釈〉

サーカスの表舞台 (サーカスの中の世界)

観客は見る人。演技する人とは別という前提に立って物を見ている。その観客の身勝手な拍手に左右されて生きていかなければならないキキは、ある意味不幸。

観客は、キキの三回宙返りを見て、夢中になる。我を忘れる。うっとりして、拍手する。

大テントの見上げるように高いところへの空間的な感じをどうイメージ化するか、ぎっしりいっぱい観客によって、人気の程は、初めて具体的に知らされるのであるが、「いつも」という表現は、特に人気の恒常性を示すものとして、以後、キーワード的に使用されることを確認しておかなければならない。

〈発問4〉お客さんは何に対して、どんな気持ちで拍手するのですか。

→ 自分たちには絶対不可能なおそろしく高い処で、恐怖心を克服して、演技する姿に感動して。

〈指 示〉サーカス小屋の中の様子について、広さや、音の響き、人の熱気などを想像して、その有様を絵と文章でノートに書こう。

〈本 文〉

3 「まるで、鳥みたいじゃないか。」

「いえ、どちらかという、ひょうですね。」

「いや、お魚さ。あゆはちょうどあんなふう跳ねるよ。」

〈解 釈〉

「鳥」「ひょう」「お魚」といった表現は、後の四回宙返りの描写に於けるたいへん見事な比喩と一体をなすが、鳥が空中飛翔の形態を表しているのに対して、「ひょう」と「お魚」は、それぞれ、跳ぶ、という平面からの力強いバネを表現している。特に、「お魚」に至っては、水中からの跳びあがりといった、かなりの力動感を感じさせるが、見方によっては、単なる超能力的な見解から、人為的な技としての見解へと、観客の、キキに対する人間的把握に逆に近づく自己移入が読み取れる。だが、観客にも跳び方のとらえ方に個性はある。つまりここでの隠喩は、結末部分の四回宙返りの描写と異なっており、三回宙返りを一括りとして総括した表現になっている。

ここまでの、作品に於ける状況説明の場である。登場人物のキキに象徴される人気と、三回宙返りの観客を通しての感慨とが描かれ、読者は、単なる語りの視点から、半ばキキの立場に自己を置きかけ始めるであろう。

隠喩表現 伏線である旨、Ⅳでの表現と比較することを頭に入れて指導せよ。観客は演技の中に入って同化している。

鳥 優雅に、ゆったり → Ⅳでは滑らかに空を滑るように
ひょう 筋肉のしなやかな動きや鋭さを想像。獲物に向かって猛スピードで大地を駆け抜ける。力強さ、速く、すべるように。しなやか。
お魚（あゆ） 活きがよく、ぴちぴちと川で跳ねる。お魚のように生き生きしている。

〈生き生きとした様子や輝き〉

キキは、鳥でもひょうでも魚でもなく、ブランコ乗りのキキ。

〈指 示〉三回宙返りの映像をイメージして、絵〈線描画〉に描いてみよう。

〈発問 5〉キキの三回宙返りをお客さんはどのように受けとめているか。

→ 人間わざと思えぬ華麗な美しさにただ呆然としている。

〈本 文〉

6 人々はみんな、キキの三回宙返りを見るために、そのサーカスにやってきました。

〈発問6〉観客にとってキキはどのような存在か。

→ 人間技とは思えない、神のような、サーカス団唯一の代表的存在。

〈発問7〉「見るために」という表現から、そのサーカスに於けるキキの立場

や役割について述べなさい。

→ サーカスの観客の確保、即ち、経済的な基盤を支えている。

〈本文〉

7 どの町へ行っても、キキの評判を知っていて、だからそのサーカスは、
いつでも大入り満員でした。

〈解釈〉

どの町へ行っても…あちこちの町を動き回る生活。Ⅲの「ある港町のカーニ
バルにやってきた夜のことでした。」の伏線。

サーカスというものの性質。予備知識。→ 渡り鳥的旅芸人

キキにとって、空間的、時間的に全ての人生を領する世界、即ち、恒常的
であるが、世間の人々にとっては、非日常の世界。

↓

日常性からの脱皮

〈発問8〉キキの幸福の根拠は何によりますか。

→ 観客からはいつも人気と評判、興行主からはドル箱的存在とし
ての評価。仕事と生き方との両面からいつも満足。

〈指示〉サーカスの人たちの生活について調べておこう。

〈本文〉

8 「なあ、キキ……。」 9 団長さんはいつも言うておりました。
10 「おまえさんは、世界一のブランコ乗りさ。だって、どこのサーカス
のブランコ乗りも、二回宙返りしかできないんだからね。」
11 「でも、団長さん。いつか、だれかがやりますよ。 12 みんな、一生
懸命、練習をしていますもの。 13 そうしたら、わたしの人気は落ちて
しまうでしょう。」

〈解 釈〉

ここからは、第一場面の後半。いつも団長さんにそう言われる度に、キキの頭の中に去来するのは、いつもそれを保つことへの不安である。したがって、不安はそれを聞くたびに次第に醸成されていったに違いない。だから、ここは人気の崩れることへの不安を垣間見せる場として設定され、読者は、キキその人と同じような感情に引き入れられる。団長さんの「世界一のブランコ乗りさ」ということばは、キキの人気のもとである相対的な価値を不動のものとして信じきっている陽気さがあるが、さらに、「いつかだれかがやります」というキキの心配をむべなく「おまえさんは四回宙返りをして見せればいいじゃないか」という安易な結論を出すことで、それ以上悩みはしない。興行主としてのある意味での非情さがここにあるけれど、そうした非情さは、人気や評判こそが生活の基盤である世界に於いては、一般的なことであることは言うまでもない。そうした一般的な価値へ身を投じているキキであるからこそ、キキは悩むのである。

テント小屋の裏舞台の場面。一会話と説明。

10の文体は「結果—理由」の対応的表現として分かりやすくなっている。

キキは、観客や団長の期待から生まれる使命感による焦りから、いつも周囲のサーカス団の様子が気になっている。→ 追われる者の後ろが見えない不安。

団長さんはキキ（の人気）に頼っている。

キキは、団長さんの期待や、人々の評判の中で生きている。→ 団長はいつも幸せを確認し、満足する。

いつも、「でも」から始まっているキキの会話。状況の中で、定められたものに対して、受身的に発信する子供。したがって、不安の介在する生活を送っている。

「いつも」（恒常）と「いつか」（非常時）の狭間に真剣に生きるキキと現実感のない団長との比較。

〈発問9〉キキにとって団長はどのような存在か。

→ 雇い主。したがって、仕事に関しての命令を下す人。

〈発問10〉なぜ、11「いつか、だれかがやりますよ」といった発言ができるのか。

→ キキは過去に父の「三回宙返り」を超えた体験があるから。

〈本文〉

14 「心配しなくてもいい。 15 だれにも三回宙返りなんてできやしないさ。 16 それに、もし、だれかがやり始めたら、おまえさんは四回宙返りをして見せればいいじゃないか。」

〈解釈〉

「おまえさん」という呼び方、子ども扱い。

15の表現から、キキは唯一絶対神的存在でなければならぬという使命感が窺われる。

団長はキキの（「そうしたら、わたしの～」）不安を真剣に受け止めていない。（楽観的）

励ましの言葉ととれる。団長は「ほめことばとプレッシャー」をこうしていつも与えている。

キキは思い入れの違いで本気に受けとめている。

〈発問11〉14の団長のことばは本当にそう思っているのか。

→ 単純にそう思っている。

〈発問12〉団長の意図から、団長の性格はどのようなものだと考えられるか。

→ 太平楽・陽気

〈本文〉

17 「四回宙返りを？できませんよ。練習してみました。三回半がやっとなんです。 18 本当に、鳥でもないかぎり四回宙返りなんて無理なんです。」

〈解釈〉

ここから、キキの「いつも幸福」という評判の中での自己満足は、心配にとって変わる。「鳥でもないかぎり」といった超人的な要求と、そのことが齎す絶望的な危機意識によって幸福は崩れ始めるわけであるが、そのことは

キキにとってすでに自覚的であるということが大切なのである。まだその時期は来ていない訳であるから、「少し」心配なのであり、「四回宙返りをしなければいけないだろうか」の「か」に示されるように、単なる疑問といった感じに留めている。そしてこの段階では、「三回半がやっと」であり、後に練習した結果の「もう少しのところ」までには、まだ飛行距離の点で及びもつかないことを読み取っておくべきである。

こうして、評判という相対的な価値基準のなかで、自己を保つことにつきまとう心配が示唆されることで、読者は人気の絶頂にいるキキの内面に入ることになる。

できるはずがない、と断言していることからすると、この結論は、プロとしての確信と見做すべきである。苦しむキキ。長年の経験から体で感じる自分の限界が見えている。

鳥なら飛べる、という前提。人間では無理という結論。

その後、危険と無理を承知の上で、プライドと人気を保ちたいがために、四回宙返りの練習へと自分を駆り立てていくキキ。

〈発問13〉キキはなぜ「頑張ってみます」と言わなかったのだろう。

→ 可能性は全くないと思っているから。

〈本文〉

20 キキは、人々の評判の中で、いつも幸福でしたが、だれかほかの人が三回宙返りを始めたらと考えると、その時だけ少し心配になるのです。

〈解釈〉

時間的にも質的にも、まだ「少し」である。それは、まだ暫くは、或いはひょっとすると永遠に実現しないだろうという期待を持っているから。

人気の絶頂にありながらも、常に怯えねばならないトップを行く者、独特の悩み。

語り手は、キキの視点で内面に立ち入って語っている。

幸福と、幸福が壊れることへの心配。

四回宙返りをやる、やらないという二極化した考え以外に何もないキキ。

〈発問14〉四回宙返りについて、キキと団長はどう考えているか。

→ キキ—絶対できない。

団長—やれば出来る

〈本文〉

21 「そのときは、団長さんの言うとおりに、四回宙返りをしなければいけないのだろうか……。」

〈解釈〉

対話不成立。キキの内言語。17に対して、団長は無応答である。

向上的な意思ではなく、外からの威圧、使命・義務として受けとめざるを得ないキキの苦悩、不安。人気商売。スターであり続けることへの不安。第一人者としての自負、プライドから、自分の居場所・存在価値はここにしかない。そう自分も思っている。人気を保つために、そうとしか考えられないキキの幼児性。それ以外の世界を知らない。

〈発問15〉団長の言葉をキキはどう受け止めているか。

→ できることならやりたくない。とまどい。

〈発問16〉キキの幸福の根拠は他のブランコ乗りの幸福と比べたとき、どう違うと思われませんか。

→ 唯、一番でない気がすまない。

〈発問17〉……は何を表しているか。

→ 本当にそうしなければいけないのかを悩み迷う気持ち。

自信なく不安。まだ現実化するには遠い幻の不安でもある。

自分に問題を抱え込み、次第に追い詰められていきっかけを与えられた場面。

呼応関係 16「見せればいい」— 21「しなければ…」

18「鳥でもないかぎり」— 28「人間にできることじゃないよ」

（Ⅱ）第二場面 キキと口口の会話とキキの苦しみ

孤独感。常に観客に存在を保障されていないと寂しい。

指導目標 — 読み手は知っているが、観客も団長も知らないキキの不安と覚

悟への萌芽 —

四回宙返りの練習に打ち込むキキを心配するロコに対し、人気落ちることは寂しいことだから死んだほうがいと悩み、苦しみに揺れ動きながら次第に自分を追い込んでいくキキの心情の読み取りを通して、二人の価値観、生き方、考え方の違いを追究する。

〈概括した解釈〉

人気への執着と、それが崩れたときの不安は、キキのアイデンティティを脅かした。したがって、存在の危機への不安が恒常化しつつあることを観客は知らない。四回宙返りをしたら死ぬよと忠告するロコのことばも受け付けないキキは、子供のように一途であった。何故に子供のようにであったか。観客には人間としてのキキは見えていない。

キキがなれるはずもないピエロに、ロコはなぜ「なれ」と言ったのか。ここで、「人間にできることじゃないよ」とは、ロコの悟りきった生き方を示している。ピエロとは、大別して、「もっぱら愚かさ故に笑いの対象となる『田舎の道化』の系列と、とんちと歌をもって王侯貴族に仕える『宮廷の道化』の系列の二種類がある。」と言われる。サーカスの道化は、その進行上の狂言回しを勤める役を担うと考えられているが、上の区別に従えば、当然、観客にとっては前者の意に理解されるであろうけれど、キキに対するこの忠告はまぎれもなく後者の道化としての言い分である。シェイクスピアの「リア王」の中に出てくる道化は、その風刺精神と批判精神によって、笑いを凍らせるほどの痛みを相手に与えるとして有名だが、人生を睥睨したものの見方は確かに備えている賢さがあるという点に於いて、ロコもまた同じであると考えることができる。「ピエロなら、どこからも落ちやしない」ということばは、「落ちるところがない」ということを表している。つまり、「落ちる」は、相対的な空間の距離感を示していることになる。人気とか評判とかが、相対的な概念であることは先に示したが、「ピエロ」が、そこにいない、つまり、相対に対する「自己」の絶対化を自覚しながら現実の世の中に交わっているという生き方を示しているということになる。「落ちやしない」とは、相対性に左右されなくても、現実の世の中に生きられる土着性・地着き性を

意味しているが、そのことは当然、人間のいたし方ない生き方に対して風刺と批判とに自己の存在基盤を置くしかない、というピエロの性格を示している。「リア王」のリアには、擲揄は分かるが、幼いききには分からない。人間としての人生の深みのないキキには通じない。「人気落ちるということは、きっと寂しいことだと思うよ。」というキキの言葉は、「寂しい」という孤独さに耐えられない、つまり、自己の絶対化に耐え切れない弱さ（幼児性）を物語っているということになる。そこでの「寂しい」とは、自己と他者との相対的な関係を期待したときに成立する甘えの自覚である。ここで問題にしなければならないことは、「お客さんに拍手してもらえないくらいなら、わたしは、死んだほうがいい……。」ということばである。ここに至って、キキの人気という相対的価値観は、絶対的価値観である全生命を侵食することになる。

〈本文〉

22 キキは、サーカスの休みの日、だれもないテントの中で何度か練習をしてみました。 23 でも、いつももう少しというところで、ブランコに届かずに落ちてしまうのです。 24 練習の時には、落ちたときの用心に、下に網が張ってありますが、本番の時には、それがありません。 25 キキのお父さんも、空中ブランコのスターだったのですが、三回宙返りに失敗して落ち、それがもとでなくなったのです。

〈解釈〉

心配を覚えたキキの孤独な練習が始まる。ところが「いつも」もう少しのところで落ちてしまうのである。「鳥でもないかぎり」という自覚は、覆すことはできない。父の死が説明された後に、ピエロの口口が登場する。

失敗イコール死。死と隣り合わせである。もしかしたら、自分も父と同じ運命を辿るかもしれない。

危険と無理を感じつつ、プライドと人気失われることの恐怖が、四回宙返りの練習へと駆り立てていく。

なぜ、そんなに簡単に死とつながるのか。他の生きる術を持っていないか

らである。キキの生は父の先例と人気の二極化しかない。経験不足，教養不足の単純な幼児的発想しかもてない世界の中でしか生きてこなかったからである。

自信ない四回宙返り（I）を何度も練習するむなしさ。心の中ですでに諦めきっている。

自己暗示も多少はあるのでは。

「いつも」幸福 ⇔ 練習の「いつも」心配。

24の「練習の時」と本番の時は表現上の呼応関係にある。かつて、17で三回半がやっとならったキキが、「もう少しのところ」まで練習の結果到達したというなら、これは進歩である。ならば、なぜ、キキはその先を求めようとはしないのか。ここを進歩と見るのか停滞と見るか、判断の分かれるところである。

〈発問18〉キキは、どんな気持ちで練習に取り組んでいたのでしょうか。

→ 半ば諦めながらも必死になって、悩みをふっ切るため。

〈発問19〉キキは、父の死をどのように受け止めたのでしょうか。

→ 英雄的行為として肯定していた。自分もそうなるであろう。

〈本文〉

26 「およしよ。」 27 練習を見にきたピエロの口ロがキキに言いました。

〈解釈〉

口ロ オ段の音二つ。字の形が口から太っているイメージ。したがって、動作がゆっくりしている感じ。キキやピピと対照的。

〈発問20〉なぜ口ロはキキに四回宙返りをやめろと言ったのか。

→ キキの命をこの上なく大切に思う口ロの友情。

〈指示〉常体で会話している二人の口調等を参考にして、口ロとキキとの年齢差、体型は？それぞれ二人の特徴を比較して、イメージを持ちなさい。

→ キキはすらりとした体型、中性的未成年。年齢差を越えて対等に話すキキの幼児性。

→ 口ロは太り気味の中年男性。悟りきった大人の風格。

〈本 文〉

- 28 「四回宙返りなんて無理さ．人間にできることじゃないよ．」
29 「でも，だれかが，三回宙返りを始めたら，私の人気は落ちてしまうよ．」

〈解 釈〉

少し心配．17でキキが団長に「出来ませんよ．練習してみました〜」と言ったことと，同じことを口にも言っている．したがって，キキにとって分かりきったこと．価値観の差．（反発するキキ）

キキはいつも「でも」から始める．前者への否定．28の問いに答えてはいない．28を肯定した上で，つまり，「自分も出来ないことは十分承知の上で，そうだけれども」という反論となっている．

〈発問21〉「私の人気は落ちてしまうよ．」 とあるが，落ちたらどうなるのか，想像せよ．

→ 拍手なし，話題なし，無関心．寂しくしょげるキキの姿．つまり，観客の期待と信頼が失望に変わる結果，もう二度と顧みられることはないという孤独で相手にされないゆえの，居場所のなくなる惨めな姿．それへの恐ろしさが襲う．だが，そうした体験のないキキに，どんなイメージが浮かぶのか．

価値観の差 （反発するキキ）

〈本 文〉

- 30 「いいじゃないか．人気なんて落ちたって，死にやしない．ブランコから落ちたら死ぬんだよ． 31 いっそ，ピエロにおなり．ピエロなら，どこからも落ちやしない．」 32 人気落ちるということは，きっと寂しいことだと思うよ．お客さんに拍手してもらえないくらいなら，わたしは死んだほうがいい……．」

〈解 釈〉

キキにとって人気とは何か．（存在証明）という認識に欠けている口口．キキの苦しみを思いやり，背伸びは不要と諭すピエロの口口のことに，

キキは「死んだほうがいい。」と答える。

・ ピエロの自覚

『～死ぬんだよ。君のお父さんと同じで。』ロロはキキの父の死に立ち会っていたであろう。その悲惨な事実から、ピエロになる決心をしたかもしれない。「ほくがなったようにピエロにおなり」と言ったように。

人に笑われ、スターになれないピエロは、価値の低い仕事。それでも、自分に合った大切な仕事であるとロロは認識している。ロロはいつも低いところにいる。だから落ちない。大地にいる。存在が他人の気まぐれな遊びで左右されない。気楽なキャラクターはピエロの持ち味。だが、深く人生を見つめた結果の結論である。人生の階段からも落ちやしない。十分人生の低い位置にいることを暗示している。キキによってロロの忠告は全く理解されない故に全く無視されている。

・ キキの自覚

32 子供の頃から父の活躍する姿を見ているキキにとっては、空中でのスターであることが一番幸福であり、安心していられる居場所だったのであろう。その居場所がなくなることは、生きていないのと同然であり、いっそ父のように死んだほうがましだと考えている。

ピエロになるのは最悪の選択だとキキは考えているだろうか。それよりは死のほうがましだと考えていると分かる。

〈発問22〉「落ちる」を詳しく説明せよ。

「人気が落ちる」と「ブランコから落ちる」とどう違うのか。

→ A 精神的に陥落し、生きるすべをなくす。 B 物理的に落下し命を落とす。

ロロ A>B キキ A<B

〈発問23〉キキがなる・なれるはずもないピエロに、ロロはなぜ「なれ」と言ったのか。

→ 命懸けての二極選択で、二人ともが追い込まれているから、人生の価値観を逆転させないと解決できないことだと判断したから。

〈指 示〉ロロはなぜキキのことばが理解できないか、想像しよう。

かつて空中ブランコ乗りに憧れ、失敗した経験があるかも知れず、ロロの辿ってきた人生と、そこから生まれた価値観とをつなげることで、ロロのことばの深さに思いをはせ、その人生観について考えてみよう。また、キキの父の死のとらえ方が二人の間にどう影響を与えていたかを考えよう。

〈発問24〉「死んだほうがいい…」とあるが、本文中のどこからこの考えにたどり着いたと考えられるか。また、キキは本当に心からそう思っているか。

→ 父の死亡という体験から生まれたものであろう。父の死を、果敢な挑戦をした美談と捉えていたからこそ、ある意味で死を肯定的に位置づけられた。

〈発問25〉ロロの生き方を否定していることにキキは気づいていないが、なぜか。

→ 自分のことで頭がいっぱいで、ロロのことが見えていない。したがって、初めから会話は成立していない。

〈発問26〉なぜキキの悩みは解決しなかったのか。

→ 父の勇敢な挑戦から死を考えたが、できれば死にたくないという思いが邪魔をしたから。

〈発問27〉キキとロロはそれぞれ相手の考え方についてどう思っているか。

→ お互い聞く耳を持たず、相手のことが理解できずに全面否定していたから。キキの考えがこの機会により固まっていった。

〈発問28〉ロロの考え方は、どういう体験から生まれたと考えるか。

→ 父の落下の瞬間をまのあたりにした体験。

〈発問29〉キキはロロの仕事をどのように考えていたか。→ 無意識に軽蔑。考えの対象からはずされている。

〈指 示〉キキとロロの会話の中で、四回宙返り、人気に対するそれぞれの考え方について記述せよ。

— 図表で整理を促す。

	キ キ	ロ ロ
四回宙返り	できない 落ちる でもやる	できないと落ちる やめろ
人 気	寂しい — 死ぬ	死なない

〈発問30〉主体的に生きるとはどういうことか。二人を比較することによって考えよう。

— 本質的・哲学的・抽象化されたものを考えさせる発展的発問。

キキは周囲の考えに合わせて生きるし、ロロは周囲の考えに左右されることなく、主体的に生きるという違いがある。

教師は演出家のように読め

(Ⅲ) 第三場面 四回宙返りを決意するキキ

指導目標

ピピの成功を聞き、おばあさんとの会話中に四回宙返りを決意してしまうまでのキキの、幸福の絶頂から絶望、そして悲壮な決意へと下降する心情の変化を読み取る。

〈概括した解釈〉

— 読み手とおばあさんは知っているが、観客はもとより団長もロロも知らないキキの内省と決断 —

老婆からピピのうわさを聞き、死を覚悟したキキの決断は、純粹なものであった。決断はいつも純粹であるが、そこへ行くプロセスも純粹であることを観客は知らない。

ここでは「海」が初めて登場する。海はキキにとってピピの情報の襲いかかってくる場所である。キキはこの「海」から目を転じた時、「ほんのちょっとほほえんでみせ」る。この「ほほえみ」が語り手の見取ったものと、「おばあさん」の見抜いたものとの一致を示していることは、「おばあさん」の中に、語り手が移入していることの証拠であるが、こうした手法は、今までのキキに対する他の登場人物との関わりが全て客観的に把握できる会話とい

う形式に於いて成立していたのとは異なった姿勢を感じさせる。では、「キキのほほえみ」とは何か。「おばあさん」は、そこにキキの死の影を見て取った。死に赴くキキの顔が、寂しく「ほほえんで」みせたのである。太宰治の「女生徒」の中だったかに、笑顔で映っているひとのこぶしが、ぎゅっと握られていた一葉の写真の描写があったことを思い出した。「みせる」嘘を「おばあさん」は、悲壮な決意の諦めきったはにかみの笑いと解釈したのであろう。ここにおいて、キキにとっての「死」が、自己の生命の死であるとともに、人気の死であること、つまり、四回宙返りは必ず失敗する、と同時に、肉体も死ぬ、という二重の死を覚悟したキキの犬死への決意であったことを「おばあさん」は、そのおそらくゆがんだ「ほほえみ」の中から読み取ったのである。

死を決意しているキキに、あらゆる言葉は無意味であろう。「おばあさん」はそのことを確認した後、一方の死、つまり、人気の評価の相対的な死から、一回だけキキを救おうとする。相対的な価値観を超越した「おばあさん」にとってみれば、「相対的な価値観」というシャボン玉くらいいくらでも作ることはできるであろう。キキは「おばあさん」から、四回宙返りの出来る「澄んだ青い水」の入った小瓶を渡される。この表現から「水」はシャボン玉液ということになる。消える幻の相対的価値観の美しい見せ物として、シャボン玉と宙返りは等価なのである。だから、シャボン玉も宙返りも作ることの出来る液は同じでなければならない。

「一度しかできないよ、一度やって世界じゅうのどんなブランコ乗りも受けたことのない盛大な拍手をもらって……それで終わりさ。それでもいいなら、おやり。」ここで、第三場面は終わるのである。

この場面でのキキの心の変化

得意 → 落胆 → 愉快 → 放心 → 衝撃 → 反論 → 認めたくない →
目を背ける → 特別でない → 沈黙 → 決心 → 微笑 → 断言 → ゆっ
くり歩く → 落ち着き

〈本 文〉

33 キキのいるサーカスが、ある港町のカーニバルにやってきた夜のことでした。 34 キキは、サーカスを終えて一人波止場を散歩しておりました。 35 波止場の片隅に、やせたおばあさんが一人座って、シャボン玉を吹いております。

〈解 釈〉

前場におけるキキは、まだ「死んだほうがいい……。」といういくらかのこだわりをもっていたのであるが、ここで、おばあさんの出現に於いて、決定的な意思表示を行うに至る。「港町」「波止場」が、海を示していることは、後の場面に大きく反映する伏線と見てよいであろう。キキにとって、海とは現実の己の世界を崩壊する彼岸の世界を象徴している。それを指し示す役割を果たしている「やせたおばあさん」が「波止場の片すみに」「一人座って」いるのも不気味であるし、さらに、「シャボン玉を吹いて」いるというにいたっては、まさに狂気の沙汰である。しかも背景は「夜」である。こうした情景をあえて設定したこと自体、この「おばあさん」に対する読み手の心構えを書き手が要求していると考えることができる。では、この「おばあさん」とは、何者であるのか。

日常性 = 生

彼岸〈海〉 ← 此岸

どの町へ行っても評判。Iへ

非日常性 = 死

サーカスは夢の国。期待に胸弾ませ、現実の世界から離れ、魅了される。空中での華麗でスリル満点の演技、ピエロや動物たちの愛くるしさ、オートバイショウ、アクロバット、全人類がともに味わうエンタテイメント。別世界に人々を誘う。人々は、日常性から解放されることを求める。

各地を放浪。カーニバル。祝祭時のみの特別な時間の中だけに行われる非現実的な世界。

35 異様な光景。一人寂しく、カーニバルの夜なのに、相手にしてくれる人も誰もいない。淡く果かない夢の象徴のようなシャボン玉を吹いている。

→恒常的（あいかわらず）へ。

それと対照的に（得意そうに、満足しきった）キキの登場。

波止場でおばあさんと出会い、ピピに追いつかれたことを知ったキキが、命がけで四回宙返りに挑む決心をする場面。狂言回しのおばあさんにひかれるように死に向き合い、薬を受け取るキキの心情の読み取りが中心。

〈発問31〉 やせたおばあさんの「やせた」から何を連想するか。

→ やせているのは現実的の欲望（食欲だけでなく）の対極にある姿を示している。

〈発問32〉 「シャボン玉」から思い浮かべる意味はどんなものか。

→ 陽の光を受けてのはかない瞬間的な美しい輝き。

〈本文〉

36 「こんばんは。」 37 「ああ、こんばんは。ブランコ乗りのキキだね。」
38 「そうです。今夜の三回宙返りは、見てくれましたか。」 39 「いいや、見なかったよ。」 40 「そうですか。おいしいことをしましたね。今夜は、特にうまくいったんです。飛びながら、自分でもまるで鳥みたいだと思ってたくらいなんですからね。」 41 「みんなもそう言っていたよ。……。」

〈解釈〉

40から、この時キキは初めて、三回宙返りの技術面での向上的な進歩に対して言及した。そして、そのことは初めて客観的評価を得る。→41

にもかかわらず、この直後に、初めて三回転宙返りに成功したピピの演技も大変素晴らしいものであったことを知らされる。→47へ

「おばあさん」は既にキキを知っている。しかも、キキの三回宙返りは見ていないのである。「見てくれましたか」と聞くキキの他者への自己満足の契機は、見事に覆るのであるが、そのことを「おいしいことをしましたね」と言うにいたって、自己の相対的な価値観の盲目的な信頼と、他者への絶対化が現れる。つまり、「三回宙返り」は、全ての人々によって見られ、取沙汰され、それによって他者のすべては、活気を得ているという絶対的な信頼が、不特定の他者への要求となって現れたと解釈できるほど、こうした無理やり

な自己信頼は心理的に完全な自己存在への支えを表していると思えるのである。しかし、こうしたキキにとっての他者との均衡はあっさりと破られる。確かに「おばあさん」はうわさを知ってはいた。けれども、「うわさ」を「うわさ」として自分の世界へは全く取り込まないのである。つまり、「人気」によって、「おばあさん」の自己の存在の安定は、崩れはしないのである。だから、「みんなもそう言っていたよ……」という何処吹く風の態で終始していられるのである。したがって、ここは最後の場面の人々の「うわさ」の伏線となっている。

37 名前を知られていることが、キキを嬉しくした。

38 尊大、一番の自慢、これ見よがし、得意満面。自分の評判が広がっていることは、人気の高さと同比例する。自分に興味があるのだから来てくれたのだろうと想像したので、「今夜みてくれましたか？」となる。

40 おいしいことをしましたね。落胆するキキ。プライドが傷つく。→自信、自負、横柄、傲慢、教えてあげる。

41 興奮気味のキキとは対照的。知っていながら話に乗ってくる気配がない。哀れなキキよ、といった気持ち。

〈発問33〉はじめ楽しそうだったキキの気持ちは、どのように変わったか。

→ 得意 → 落胆 → 愉快

〈発問34〉キキはどんな気持ちで「おいしいことをしましたね。」と言ったのか。

→ 見せてやりたかった。自慢げ

〈発問35〉おばあさんとキキとはどんな関係か。→ ゆきずりの人。

〈発問36〉……の意味の中に含まれている意味を考えよう。

→ 結構だね。でも、たいしたことないよ。自慢しているけど、かわいそうに。

〈本 文〉

42 おばあさんは、あいかわらずシャボン玉を吹きながら、遠くカーニバルのテントの建ち並ぶ辺りですいたり消えたりしている赤や青の電気を見ておりましたが、急にキキのほうに振り向いて言いました。

〈解 釈〉

ここの原文では「こじきのおばあさん」となっている。内容的に「こじき」そのものに意味をもたすならば、ピエロの口口とは異なって、現実的な世界に入ろうとしない人物、つまり「入れない」ではなく、「入ろうとしない」人物ということになる。なぜならば、この「おばあさん」はシャボン玉を吹いているのである。シャボン玉とは、美しく日光の光を受けて輝きながら消えていく、はかない花火のようなものである。花火が夜の象徴であるならば、シャボン玉は昼の象徴でもあろう。だが、夜シャボン玉を吹くという行為は、一般には見えない本質をおばあさんは知っているという神秘的、或いは呪術的要素を備えているということを示唆している。このことは、神託を告げる代わりに、人々から恵みを受ける、という陪堂（ほうとう）の役割、つまり、乞食の役割を担っている。こじきという言葉が差別用語として排される以前の読みであるが、そうした意図を読み取れば、キキに対するおばあさんの役目もおのずから明確になることも確かである。そして、このシャボン玉のはかなく消えるという性質と全く呼応するのは、カーニバルの「赤や青の電気」である。おばあさんは「シャボン玉を吹きながら」、つまり、自分で虚構を創造しながら「電気の明滅を見て」いるのである。

「ついたり消えたり」する電気と「シャボン玉」とは、安定性のない、相対的な価値観に対する崩壊を示し、そうした価値観を「あきらめ」ている、と見てよいであろう。人生がはかないものであるということは、自分の外にある、あらゆる相対的な価値観に対して意義を認めないことを表している。なぜなら、シャボン玉を光のない夜に吹いているのだから。すると、この「おばあさん」は、全ての相対的な価値を否定して生きている、つまり、現実の社会そのものが相対的価値によって均衡を保っているとするなら、現実の社会そのものを拒否して生きている、即ち、「陪堂」としての役割を担って生きているということになる。

相対的な価値観を拒否しながら「生き」得るとは、どういうことか。自己の生を支える地盤があるからである。自己が自己の生きる信念に基づいて、何事にも動ずることなく、孤独に耐えて生きることができるからである。で

は、いかにしてそうした生き方が可能であるのか。相対的な世界のむなしさを知っているからである。次の「おばあさん」のことは見てみよう。「おばあさん」が「金星サーカスのピピが」三回宙返りに成功したことをキキに告げ、キキの人気も「今夜限り」であることを伝えた後の会話である。そこでは、興奮気味のキキとは対照的に、知っていながら話に乗ってくる気配のないおばあさん。

キキの方を見向きもせずに、話の埒外にいるおばあさん。だがやがて、期せずして今夜同時期に伝わったピピのニュースを思い出し、「急に」振り向くことになるおばあさんがいるのである。

「遠くカーニバルの」…遠くから眺めているときのどこか冷めたような寂しさを浮き立たせている。

キキの運命を哀れに感じており、ピピの話をすべきかどうか迷っている。もししたら、キキは明日決行すると言い出すに違いない。万に一つも成功することのない、死の演技に挑戦するのだ。

やがて、転落死して、凄惨な現場にキキが身を晒すよりは、成功させてやりたい。そうして究極の喝采を浴び、存在を消すほうがまだましと考えるようになったのである。さうして、たとえ自力でできたとしても、永久に誰かが四回に並ぶという次の不安にとらわれるであろうから、さらにまた、死ぬまでまだ見ぬ成功者に怯え続けるのであろうから、それを考えると、こころで楽にしてやりたい。

(工夫して、個性的な飛び方など納得できる形を追い求めていくように変化してくれば話は別だが。)

おばあさんはキキの心の中にいるもう一人のキキと見ることもできる。

孤独、お互い理解している。(つまり、会話の中、キキの心の中で、四回宙返りをしようという心と、しないでもいいという心とが闘っている。)

〈ことばの持つ象徴性を読み取る。〉

幾度も出てくる行為の意味を探る。作品の因果、変化関係に直接関わらなければ象徴性を探れ。

シャボン玉、赤や青の電気—すぐに消え、めまぐるしく変わっていく色

人気の儂さとお客の無責任な興味の移り変わりを表している。
つまり、今後、キキに降りかかる辛い現実をちらつかせている。
キキの慢心に忌々しさ、腹立たしさを感じている。

〈発問37〉シャボン玉や電気は何を表現しているのか。 → 世の儂さ。

〈発問38〉おばあさんはキキをどんな気持ちにさせたか。

→ 結果として死の決意に追い込んだ。

また、キキの気持ちを動かしたことはどれか。

→ 「～練習さえすれば、だれにでもできるんじゃないかなって考え始めるよ。」

〈指 示〉キキが落ちたときの姿を想像しよう。

〈発問39〉おばあさんは人気や評判をどのように考えているか。

→ 儂い、価値のない幻のようなもの。

狂言回しのおばあさん（筋の展開や主題の解説に終始かかわっている重要な役柄）がキキに働きかけることばの効果を読み取る。

死と四回宙返りを天秤にかけて、キキが死を選ぶ過程の表現。キキの決意を「死」、「一度しか」ということばで顕在化させる。

〈発問40〉おばあさんはどういう考えでキキと話をしていたか。

→ キキの本質を明らかにして、人生の意義を実感させるため。

〈本 文〉

43 「おまえさんはしっているかね？」 44 「何をです？」 45 「今夜、この先の町にかかっている金星サーカスのピピが、三回宙返りをやったよ。」
46 「ほんとうですか。」 47 「とうとう成功したのさ。みごとな三回宙返りだったそうだよ。」 48 「そうですか…。」

〈解 釈〉

みごとな … この褒めことばはキキの40の自慢話をいっぺんに平坦化してしまい、それはさらに、キキの存在そのものを消去してしまうほどの衝撃を与えるものであった。

ある程度覚悟していたとはいえ、ショックを受けたキキ。

そうだよ … 伝聞。キキのもピピのも、おばあさんは見ていない。

47のみごとさは、40と対応して内容的な比較を行うことにより、キキのより決定的な悲愴感を思いやるべきである。

〈発問41〉48の「……」は何を意味しているか。

→ 激しいショック。即対応することへの困惑。

〈発問42〉おばあさんはどんな人か。

→ キキの全てを理解している冷静な審判者であると同時に庇護者。

〈本文〉

49 「その評判を書いた新聞が、今、定期船でこの町へ向かって走っている。50 明日の朝にはこの町に着いて、みんなに配られる。

51 おまえさんの三回宙返りの人気も、今夜限りさ…。」 52 「そうですね…。」 53 「そうだよ。明日の晩の、拍手は、今夜の拍手ほど大きくはないだろうね。」

〈解釈〉

急転直下、全く無防備状態の中で、いきなり敵軍が本土上陸、攻撃してくる。
ピピ → 定期船 → 海から。

50 今夜限りさ。— 自分で分かっているにもかかわらず実際に人から言われると重みがあり、現実味を帯びてくる。

52 そうですね…。— 48の「そうですか…。」とともに、キキの放心状態。人気が確実に落ちるであろうことを暗い気持ちで認めるキキ。

53 確認・駄目押し。

〈発問43〉52の「……」の意味は何か。

→ 相手の反応を見つめる目も。認めたくないが、心からその通りだと同意せざるを得ない複雑な心境を表している。

〈本文〉

54 「でもね、おばあさん。金星サーカスのピピがやったとしても、まだ世界には三回宙返りをやれる人は、二人しかいないんですよ。」

55 「今までは、おまえさん一人しかできなかったのさ。それが、ピピにもできるようになったんだからね。お客さんは、それじゃ練習さえすれば、だれにでもできるんじゃないかな、って考え始めるよ。」

〈解釈〉

この「それじゃ、練習さえすれば、だれにでも」云々という言葉は、絶対的な三回宙返り、という価値観が本当は、天才の誰にも及ばない神技なのではなく、実は凡夫でも可能な相対的なものでしかなかった、という証なのである。ここに至って、キキだけが神だった、という神話は音を立てて崩れ去ったことになる。人気とか評判とかが、大衆にとって「絶対的な価値観」という幻想に支えられていたことの証明なのである。大衆は、「自分たちにはできない」ことに盲目的な拍手を送るが、その拍手は、より完璧な「ただ一人」に対して信仰的な対象にまでまつりあげる。キキその人こそこの頂点に立っていたことは、いまさら述べることでもないのであるが、キキはここで、四回宙返りと死とをまだ完全に結びつけてはいない。「まだ……二人しかいないですよ」と言ったとき、キキはその神的な絶対性への幻想が、「二人」でも成立するかもしれないという分かっているが「甘え」が存していた。だから、「おばあさん」の「だれにでもできるんじゃないかな」って」お客さんが「考え始めるよ」と言ったことばによって、絶対的に死を覚悟するのである。私はここから以降、つまり、金星サーカスのピピの話以降（56～67の会話）は、全てキキの心を試すためのおばあさんの幻術のような気がしてならないのである。

だれにでもできる — おばあさんはキキの心を読んでいる。一番志向のキキ。自分は特別な存在ではなくなる。

54 Iで「そうしたら私の人気は落ちてしまうでしょう。」と言っている。同語反復。高名という価値に向かって走る人生に殉ずる、諦めの寂しさ。

キキの心の中での会話。自分の惨めな姿を自分で目にする幻覚現象。ドッペルゲンガー（分身）。

54 やっと反論。拍手をもらえないことを認めたくなかったから。何とか、現実から目を背けようとする必死さ。

おばあさんというより、焦りと不安で一抹の自分自身を慰めるために言い聞かせているのだろう。

まだ出来ない四回宙返りへの焦りをごまかすため。

それでも、何とか自分の人気を保たれるであろうことに希望をつなぎ、自分を納得させようとするキキ。

〈発問44〉54のキキの意図を述べよ。

→ 分かっているけれど、もしかしたらおばあさんは「二人しかいない」に同意してくれるかもしれない、という甘え。

〈本文〉

56 キキは黙ってぼんやりと海の方を見ました。 57 しまもなく振り返ってほんのちょっとほほえんでみせると、そのままゆっくり歩き始めました。 58 「おやすみなさい。おばあさん。」 59 「お待ち。」
60 キキは立ち止まりました。

〈解釈〉

56 黙りこみぼんやりと見る。後の87「キキはぼんやり考えました。」の時と同じように、おばあさんへの心理的な依存度が強いときの様子として、「ぼんやり」を把握することができる。

命を落とす危険のある四回宙返りへの恐れと、その四回宙返りに挑まなければ人気を失ってしまうと言う迷いに、静かに心の中で決着をつけて、実行を決意するキキ。

57「まもなく」の即決の速さは、今まで死を覚悟していたことを、土壌が出来上がっていたことを表している。

完全なる決意。死に対するキキなりの精一杯の強がりか。失敗したらここで終わりという悲しみや、やるしかないという決心の入り混じったもの

だった。重大な決心が、それまでしどろもどろだった口調く以前の団長との会話、口口との会話の……から続いている。〉が言い切りの形になったことや、ゆっくりと歩き始めたことからうかがえる。迷いが消え、落ち着いた気持ち。

ここでの「見せる」とは、おばあさんの発言55に対してのキキの答えを示している。ここでは、おばあさんへ真向かって首肯するのではなく、海へ目を移し、それからほほえんで見せる。それは、「その通りです。」と全面肯定し、自分で始末をつける覚悟をした瞬間のはにかみである。

自分の気持ちを整理するきっかけを与えてくれたことに対して、そして、今夜一晩、死ぬ前に余裕を持ってくれたことを感謝しているのか。或いは、諦めへの自嘲と、これまでの生き方の挫折への羞恥の念がもたらしたほほえみ、さらには、不安との戦いから解放されることの安堵感からの「ほほえみ」なのか。

〈発問45〉自慢げに言っていたキキの心がなぜ落ち込んでしまったのか説明しなさい。

→ ピピの成功によって自分の地位が崩されたと思ったから。

〈発問46〉海の方を見たのは、どんな意図によるのか。

→ 海から伝わってくる知らせへの恨めしさを反芻し、決断への意思に決まりをつけるため。

〈発問47〉57でのキキの心について説明しなさい。

→ 諦め、憔悴しきった果ての決断。

〈本文〉

61 「おまえさんは、明日の晩、四回宙返りをやるつもりだね。」

62 「ええそうです。」 63 「死ぬよ。」 64 「いいんです。死んでも。」

65 「おまえさんは、お客さんから大きな拍手をもらいたいという、ただそれだけのために死ぬのかね。」 66 「そうです。」

〈解釈〉

この寂しさを、④有名・人気・一番といった高名という価値に向かって走

る人生に殉ずるあきらめの寂しさか。それとも、③現世的利害への執着，芸の世界に飛翔する魂と読めば，人並みの生を拒絶し，異星人の道を選択した孤高の寂しさと読むか。

62 … キキはどんな思いで四回宙返りを決意するに至ったのか。→諦念。

〈発問48〉決して死を望んでいるわけではないのに，四回宙返りを決意したキキの気持ちはどうなのだろう。死を恐れる気持ちを抱き，迷いながらも四回宙返りを決意していかざるを得ないキキの気持ちは。

→ 諦め。自暴自棄的なものもあったのではないか？

65 … もう一度，意思の確認。

一般の人にとって取るに足らないことであり，そんなことに命を懸けてもいいのか，とおばあさんは言っている。一般人の心を読み手は冒頭から忘れさせられている。キキに感情移入し，その立場から読み進めているため十分には理解できない。特殊な人物の特殊な姿であることを知るべきである。

おばあさんの意向は何か。一方的な意見のキキ。意思の伝達。

66 … ロロとの会話から一貫して変わらないが，あいまいな「迷い」から，「決断」に移行している。

運を天に任せて思い切ってする勝負といえはかっこいいけど。
無謀。

〈発問49〉四回宙返りを決意した気持ちを述べなさい。

→ キキの決意からおばあさんの申し出を受けるまでの間に，殆んど違和感がない。つまり，死に対する悲愴感はないのではないか。頭の中は観客の拍手を意識した高揚した思いで一杯だろう。したがって，ここでは，無謀な想像に酔っている。

〈本文〉

67 「いいよ。それほどまで考えているんだったら，おまえさんに四回宙返りをやらせてあげよう。おいで…」 68 おばあさんは，かたわらの小さなテントの中に入り，やがて，澄んだ青い水の入った小瓶を持って現

れました。 69 「これを、やる前にお飲み。でも、いいかね。一度しかできないよ。一度やって世界中のどんなブランコ乗りも受けたことのない盛大な拍手をもらって……それで終わりさ。それでもいいなら、おやり。」

〈解 釈〉

やめさせたいおばあさん。だが、逆らっても決意は変わらないから、諦めきった上で好意を示して言い渡す。いや、居直った意地悪い言い渡しかもしれない。「それみたことか」といったざまあみろ的発想。

ブランコ乗りとしての人生は終わり。ブランコ乗りだけが自分の生であるキキは、それが同時に死を意味している。その読みを先にしておかないと、変身から死へつながる過程は見えてこない。つまり、それで「終わりさ」は、それで「死ぬよ」を意味している。「死ぬよ」と書いてないから云々の説は成り立たない。

〈発問50〉 「それで終わりさ」の「終わり」は何を意味しているか。

→ 「ブランコ乗りとして」がキキにとっては「人生」へつながることをここで確認しておく必要がある。つまり、「人間としての死」を意味している。したがって、後の白鳥への化身は、死した後の変身と見るべきであろう。

〈発問51〉 薬を渡したおばあさんの意図は何か。

→ キキのこれまでの考え方の現実的な意味を身をもって本人に分からせたい。

〈発問52〉 おばあさんはこの時どんな気持ちをキキに対して持ったか。

→ 諦め → 思いやり → 同情 → 救助

(IV) 第四場面 四回宙返りをするキキ

指導目標

キキは薬に頼って四回宙返りを成功させ、盛大な拍手をもらって、姿を消すが、この結果からこれまでのキキの生き方に対しての哀れさを読み取る。キキの残したものは何ものでもなかった、ということを考える。

〈概括した解釈〉

四回宙返りが成功したあと、大きな白い鳥となったと想像した人々の心の中に生まれたものは、幼い生への悲しみであった。子供のような純粹さのもたらした悲しみの結末を、観客は娯楽として楽しみ、元気をもらった。したがって、観客はキキの純粹な悲しみについては全く理解できない。没交渉の世界である。

〈本文〉

70 次の日、その港町では、金星サーカスのピピがついに三回宙返りに成功したという話題で持ちきりでした。71 でも、午後になると、その町の中央広場の真ん中に、大きな看板が現れました。72 「今夜、キキは、四回宙返りをやります。」73 町の人々は、一斉に口をつぐんでしまいました。そして、その看板を見たあと、ピピのことを口にする者はだれもいなくなりました。74 夕食が終わると、ほとんど町じゅうの人々がキキのサーカスのテントに集まってきました。

〈解釈〉

人気と評判に支えられた町の人々のうわさへの反応は、見事に価値観を転覆させ、再び、期待に基づいた新たな価値観に興奮する様が描かれる。

70 持ちきりでした。… 町の人々の興味・関心・好奇心の高さを示している。

71 誰が看板を立てたのか。キキが自分で。或いはおばあさん。盛大な拍手をキキに与えたいための心遣い？

73 余りの驚愕にただ啞然とする。

新しいもの、目を引くのものへと次々に興味が移っていく、観客たちの移り気な心が表れている。

〈発問53〉 看板を見たあと、なぜ「ピピのことを口にするものはだれもいなくな」ったのか。

→ 次々に新しくなる事実や事柄にしか人々は興味をもたないから。

〈本 文〉

- 75 「おい、およしよ。死んでしまうよ。」 76 ピエロの口口がテントの陰で出番を待っているキキに近づいてきてささやきます。
- 77 「練習でも、まだ一度も成功していないんだろう？」
- 78 陽気な団長さんまでが、心配そうにキキを止めようとします。
- 79 「だいじょうぶですよ。きつとうまくゆきます。心配しないでください。」

〈解 釈〉

キキの死を知っているピエロは、馬鹿らしい自殺行為を止め、陽気な団長さんまでが心配そうに止めようとする。止めた口口と、止めようとした団長の違いは、既に述べた二人の立場と生き方によって明らかである。

78 楽天家の団長。他意はない。この時は、純粹に心配している。

〈発問54〉「までが」に込められた団長さんの人柄を考えよう。

- 人間関係は希薄である。キキに深入りもしなければ、本気になって意見を述べる熱情もない。興行主と芸人というただそれだけの関係より深くはない。一般的によくある現代人のタイプ。

〈本 文〉

- 80 音楽が高らかに鳴って、キキは白鳥のように飛び出してゆきました。
- 81 テントの高いところにあるブランコまで、縄ばしごをするすると登ってゆくと、お客さんにはそれが天に昇ってゆく白い魂のように見えました。
- 82 ブランコの上で、キキは、お客さんを見下ろして、ゆっくり右手を挙げながら心の中でつぶやきました。 83 「見ててください。四回宙返りは、この一回しかできないのです。」

〈解 釈〉

白鳥は第一場面に出てきた客の比喩と呼応する。ここで、「たましいのように見えた」というのは、すでに肉体はキキのものではないことを示している。本当は、肉体も魂も、初めからキキのものではなかったのかもしれない。人気と評判に自己の主体性を喪失しているキキに、魂などありはしないのだ

ろう。しかしながら、キキ自身それはどうすることもできない必然性をもっていた。キキの悲しみは、そうせざるを得なかったと言うところにある。キキは決して喜びを求めて四回宙返りをしたわけではない。いつのまにか、あきらめきった寂しげな決意によって、そうせざるを得ない自分に追い込んでいた。だからキキの「たましい」はどこへもたどりつけず、いつまでもあらゆる世界に入り込めずに漂うほか仕方がないのである。こうした意味での「たましい」とは、既に死を覚悟したキキが、一度だけの人気を得ようとする悲しみを象徴的に描いたものであろう。お客さんにそれが見えたことこそ、客自身、どこかで、現実生きるという主体性の何であるかを探し求めている自分を持っているからに他ならないことを暗示している。だから、客の代替としての主体的な生き方の形象であるキキの宙返り、即ち、金を出しての日常性からの飛翔を夢見る幻想遊びを現実と受け取らざるを得なかったキキの自己中心的な悲しみが、客自身に伝わってきたと見ることができるのであろう。

80 大きな白い鳥になることを暗示。語り手の視点。

81 自分の目指すものを求める純粹さ、気高さ。

白い魂 … 唯々飛者となってこの一回に全てを燃焼させる意気込み。観客にも通じる。

死を覚悟したキキの清澄な姿。宙返りの瞬間、キキの動きだけをクローズアップした静謐さの中的美。これらの表現を通して、キキの行為を昇華し、白い大きな鳥に変身したと暗示する結末に到る。だが、死を覚悟し、死の影が背後を襲う。

昇天・魂 … 不吉な予感。

魂というのは、死を覚悟した強い意思が見させるもので、だから、それは、「死ぬかもしれない」という予感めいたものを感じる。このことが町の人々のうわさ、「白鳥がキキかもしれない」につながる伏線となっている。

82 見下ろして … おばあさんにもらった自信と余裕を持った決意。

83 これで終わりという悲壯感。でも、驚かすぞという虚栄心。拍手への

期待.

〈発問55〉お客さんに見えた白い魂とは何を象徴しているか考えるか.

→ 死を覚悟したキキの抜け殻, つまりは肉体のない死霊. 死を予感させるような存在.

〈発問56〉暗闇に乗り出す前のキキはどんな様子だったか.

→ 命を懸けた死の予感. 演技と拍手への期待で一杯になった. 最後の輝きに満ちている.

〈発問57〉なぜ, 「見ててください」とキキはつぶやいたのか.

→ まやかしを忘却せしめて, 命と引き換えに獲得した技であることを誇示したかったから.

〈本文〉

84 ブランコが揺れるたびに, キキは世界全体がゆっくり揺れているように思えました. 85 葉を口の中に入れました. 86 「あのおばあさんも, このテントのどこかで見ているのかな…」 87 キキは, ぼんやり考えました.

〈解釈〉

葉をもらったキキの胸中は, 確かに一回だけの可能性を信じてはいるのであろうが, ここに, 葉によって促された精神主義的解釈を持ち込む必要はないであろう. それは, 死を覚悟して空中ブランコに乗ること以上に精神を高揚させることなど, 人間には不可能だからである.

キキは, 自分が中心にいることを幻想の中で実感するようになる. 「ブランコが揺れるたびに, キキは, 世界全体がゆっくり揺れているように見え」たのである. キキはこう思ったに違いない. 自分を中心にして, 世界全体の価値観が揺れている, と. しかし, それは, 単なる幻想としての人気によって左右される相対的な価値観なのであった. 葉を口に入れたキキが, 「あのおばあさんも, このテントのどこかで見ているのかな…」と考える場面があるが, ここは, キキと「おばあさん」の価値観との違いが, 明確に再確認できるところである. 「おばあさん」に期待を掛けることほど, 「おばあさん」

の意に反することはないからである。

84 世界とはサーカスの表舞台という特殊環境の中の世界。ゆっくり—余裕を持って睥睨している感じ。或いは、酔っているような、正常な神経でないような状態？自分がブランコとともに揺れることによって周囲もゆれる。世界ということばを自分のことばとして用いたのは初めてで、ここに至って、キキの価値観の限定が明確となった。キキの世界とは、住んでいる世界、世界一のブランコ乗り、世界中のこうした世界全体を指す。キキはそれらをまとめて、自分の自覚した世界と思い込んで、鳥瞰し、睥睨していた。これは三回宙返りが見事に行えたときの得意さにつながる。

この世界に一定の不動のものなど何もない。自分への期待のために、息を含み、緊張と興奮とに沸きかえっている、テントの中いっぱいの大勢の観客のどよめきと熱気が潮の寄せるようにゆっくりとゆらめくように見える様子。キキにとって最高の陶酔状態。

〈発問58〉この世界とは、キキにとっては何であるのか。

→ サーカスの世界を超えた全世界のつもりであるが、結局はサーカスの小世界。

86 自分をわかっていてくれる人に見てほしい。

唯一自分を理解してくれる孤独な者（理解し合いたい）同士の二人。そのつながり、満足と死への決断。何もかも分かっているもう一人の自分に対するメッセージ。でも、誰にも理解されない悲しさ。セレブリティ（高名）の病にとりつかれた人の悲劇。

87 56と同じ。おばあさんへの依存度が強い。

〈発問59〉なぜキキはおばあさんが見ているか、とひとりごとを言ったか。

→ 同感を得たいと思ったから。

〈発問60〉「…」の意味は何か。→ 自分のことを思ってくれることへの期待。

〈本文〉

88 しかし、次の瞬間、キキは、大きくブランコを振って、真っ暗な天井の奥へ向かって飛び出していました。

〈解 釈〉

弛緩 → 緊張へ

客が気づくのに遅れるほど、キキの動作は急激で早業であった。→神秘。鳥。ぼんやりと考えていたのはキキの視点（静）、「飛び出していました。」もキキの視点だとすると、キキ自身は無意識の行動を体が自然に動いてとっていた、ということになる。観客の視点だとすると、キキのプロ的動作の鋭さへの驚嘆ということになる。

比喩を見ると、キキからの発動された、主体化された表現になっている。しかし…静に対しての、いきなりの動。

華やかな四回宙返りはまったく違う暗闇へ向かっていく。

真っ暗な天井の奥…暗黒に向かって。結末の危機的状況・死への暗示。

〈発問61〉読者は「真っ暗な天井の奥から」という表現からどんなことを思い描くか。

→ 悲惨な行く末。

〈発問62〉「いました」と「いきました」とは、どう違うのか。

→ 外界の人々の予想だにつかぬ行動であった。

いました → 観客は瞬時には気づかなかった。或いは、キキ自身も気付かぬほど身体が自然に発動して。

いきました → 語り手と観客は一連の演技の流れを順を追って見つめ、掌握していた。

〈本 文〉

89 ひどくゆっくりと、大きな白い鳥が滑らかに空を滑るように、キキは手足を伸ばしました。 90 それがむちのようになって、一回転します。
91 また花が開くように手足が伸びて、抱き抱えるようにつぼんで…二回
転。 92 今度は水から跳びあがるお魚のように跳ねて…三回転。
93 お客さんは、はっと息を飲みました。

〈解 釈〉

語り手の視点で直喩。冒頭は観客の視点で隠喩。しかも、ここでは、薬の

力を得ての必ずできるという確信に裏付けられたキキの意識的・主体的動作の確かさとして描かれている。⇒83 「見ててください～」 脚から先に後ろ向きに回転する。

93 それまでの見事な演技への賞賛もさることながら、思わず山場に来た。これからが問題だ。できるのか、失敗するのか、期待よりも不安が先走る。

89 大きな白い鳥, 92 お魚, 94 ひょう, …そのいずれでもないキキは、キキでしかあり得ない。

〈本文〉

94 しかしキキは、やっぱりゆるやかに、ひょうのような手足を弾ませると、次のブランコまでたっぷり余裕を残して、四つめの宙返りをしておりました。 95 人々のどよめきが、潮鳴りのように町じゅうを揺るがして、その古い港町を久しぶりに活気づけました。 96 人々はみんな思わず涙を流しながら、辺りにいる人々と、肩をたたき合いました。

〈解釈〉

94 切り替わりの強調。93→94へ。

94, 99 この時の観客の感動は、単に宙返りの回数だけにでなく、40, 47を踏まえての完成した自覚的な華麗さから受けるものであった。

95 何の変哲もない日常生活からの脱皮。潮鳴りは遠くから聞こえる寄せては返す波の音。

96 華麗な技を見せるキキの内面の葛藤に少しも気づかぬ移り気な観客。自分たちの世界しか考えない。彼らに罪の意識はないだろうが、キキの生き方についての影響力は多大である。

成功の涙に咽びながら、観客は感動し、興奮していたのに、本人のこととなるとまるで無関心。演技が済めば忘れ去っていた。

〈発問63〉宙返りを終えた96の後の観客の反応について述べなさい。

→ 興奮して、自分たちだけの世界に入った。

〈本 文〉

97 でも、その時、だれも気づかなかったのですが、キキはもうどこにもいなかったのです。 98 お客さんがみんな満足して帰ったあと、がらんとしたテントの中を、団長さんを初め、サーカスじゅうの人々が必死になって捜し回ったのですが、むだでした。

〈解 釈〉

97 いなくなる時、誰にも気づかれないキキの孤独？自分からそっと消えざるを得ない正体暴露の恥からの逃避。キキに寄り添った語り手の視点。キキのこれほどの技に対して、キキその人に関心の全てが集まっていいはずだし、キキもそれを受け止める共有した感動があってもいいはずなのに、そのつながりは全くなってしまっていて。…だが、客は、自分たちの満足に浸りきって、非日常性を共有できたことに興奮して、キキのことなど眼中にない。

悪魔に魂を売り渡したから、もう存在することは許されない。いたたまれない気持ち。

拍手が沸いた。⇔ でも、キキはどこにもいなかった。それに喜び、浸り、応えるべきキキの存在が居なかった。

拍手に応えることができない。本来なら、行う前と同じ、手を挙げて、観客を見下ろしていいところであるのに、引け目一恥一消え入りたい。だが、意識が急になくなり、一瞬にして変身。

98 サーカスの中は、キキの不在という大きな穴。原因不明。
何が何だか分からず、右往左往しながら必死で探し回るサーカスの人々の姿。

〈本 文〉

99 翌朝、サーカスの大テントのてっぺんに白い大きな鳥が止まっていて、それが悲しそうに鳴きながら、海の方へ飛んでいったと言います。

100 もしかしたらそれがキキだったのかもしれないと、町の人々はうわさしておりました。

〈解 釈〉

四回宙返りは成功し、その興奮は町中に響き渡ったけれど、キキの姿は見えず、翌朝、「白い大きな鳥」が「悲しそうに鳴きながら、海の方へと飛んでいった」ということである。「悲しそうに」を今更繰り返す必要もないであろう。人気と評判に死を掛けた愚かなキキの生き方は、死をもって自覚することができたわけであろうが、この鳥になったと思われるキキは、なぜ、「海の方へ」飛んでいったのか。「海」とはおそらく人間世界からの離脱を促す世界であろう。

牧水の「白鳥は哀しからずや空の青海の青にも染まずただよふ」という歌を思い出す。結局何処にもキキの染まる世界はなかったのである。

キキは人間存在の主体性を失った、哀しい存在であった。人々は、いつでも、こうした価値の中で、自己を失って生きている危機的状況に対面しながら存在する。そして、真に生きる姿の外に「海」を見る。孤独に耐え、自己の実存から逃避する場所は「海」である。海はロマンチックで美しい彼岸にある。それは、見るものにとっては、自己を自己として引き受けずに済む他界なのである。

こうしたキキの死を、人々はやはり、「うわさ」としか受け止めない。

99・願いをかなえながらも、自らの運命を悲しむキキの心情を読み取る。

→どんなに大きな拍手をもらっても、死んでしまえば終わりだ。だからキキは鳥となった。

- ・成功させた代償として、鳥となって人間世界から去ることになってしまった。悲しい人生。
- ・登場人物だけが感じた現象的解釈と、読者の全視点で受け止めた解釈の違い。
- ・白い鳥はなぜ悲しそうに鳴きながら、と人々の心に伝わるのか。→現象的なこと。鳴き声の研究へ。
- ・町の人々が想像したであろうことは、①それまでの白鳥に比喻、②白い魂に見えたこと、③姿が消えたこと、したがって、鳥になってしまったかもしれないと思ったこと、さらには、それは情けないこと、寂し

いことであること、等であろう。キキに寄り添ってみれば、①成功後、憑き物が落ちたかのような状態になってやっと自分を冷静に見つめることができ、おばあさんとのやりとりの中で、だんだん追い詰められていった挙句、成功を急ぎ、実力以外のものに頼ってしまった自分の愚かさが見えてきたのではないか。だが、町の人々にキキの心の中まで分かるはずはないのだから、そのへんのことをきちんと整理して読んでいかないといけない。

- ・鳥になっても心は残った。四回宙返りを成功させながらも、人間ではなくなってしまったキキの気持ちを読み深める。実感として湧いてきたのは成功よりも命の滅亡。もう宙返りができない。薬なんぞ飲むべきではなかった。悪魔に魂を売り渡したのだから、既に存在することはできない。
- ・サーカスの外の世界、決して中に入れない。人々が事実を見ての報告であり、「悲しそうに」は鳴き声をそう感じたわけであるから、必ずしも、鳥の心、内面を指しているわけではない。もし、人々が観客であるなら、白い魂に見た不審な現実とのつながりが、そう感じさせたのではないか、ということである。そのほかには、人々とキキの悲しみとはつながるはずはない。

キキが鳥であるということは、比喩の中からうかがえるが、キキの悲しみを本当に理解できるのはおばあさんのほかにはいない。

- 100・もし人々の言うように、白い大きな鳥がキキだったとしたら—と考えるのは、作品理解のうえで大切である。その場合、あくまでも、キキの心の中に読者が入って、語り手の語る情報を全て感得した上でこのことであるという条件を決して見逃してはならない。このことを間違えると、文学教育の根本が違ってくる。
- ・悲しそうに … 誰にも理解されない悲しさ。町の人々の冷たさと、うわさくらいはする温かさ。
 - ・鳥のようになりたいと願っていたキキの思いが、キキを鳥にさせた。
 - ・読者が、キキの心の中に入って（観客には入れない）悲しさを想像す

ることはできる。

・白鳥は死の前に歌をうたう。死に臨んで、美しい声で鳴く。(北欧神話)

〈発問64〉「悲しそうに鳴きながら」とは、どんな鳴き方、鳴き声、様子であるか。

→ 低く長く引つ張る鳴き方。次第に消えてゆく鳴き方は、白鳥でなくとも哀れを誘う。

〈発問65〉町の人にはなぜ白い大きな鳥をキキだとうわさし合ったのか。

ア 観客からは

- ① まるで鳥みたいじゃないか。
- ② 白鳥のように飛び出して～
- ③ お客さんにはそれが天に昇ってゆく白い魂のように見えました。
- ④ ひどくゆつくりと大きな白い鳥が滑らかに空を滑るように、キキは手足を伸ばしました。
- ⑤ 白い魂は死を覚悟していることの現れであることを考えると、そうした雰囲気のようなものを直感した観客の心の中などを加えることができる。

イ キキ自身からは

- ① 本当に鳥でもないかぎり無理なんです。
- ② 飛びながら自分でもまるで鳥みたいだって思えたくらいなんです。

などの見方があるが、ここでは、キキ自身からの視点は全く関係がない。観客が思ったのは、①～④までである。

ウ 語り手からは

- ① 直前の「キキはもうどこにもいなかったのです。」といったキキの消息。
- ② それまでのキキが、鳥の比喩を用いて受け止められていること。

〈発問66〉もし、大きな鳥がキキだったとしたら、キキの心の中はどんなだったか。

生徒の予想

- ① 全てをやり遂げて満足した。
- ② 最高の拍手をもらえて嬉しい。でも、空中ブランコには乗れない。サーカスには戻れない。
- ③ もう二度と拍手をもらうことはできない。→また乗りたい。
- ④ こんな姿になってしまった。あの時薬をもらわなければよかった。これでしばらくは世界一でいられるけれど。人間に戻りたいなあ。
- ⑤ 薬のおかげで出来たが、もうできない。おばあさんのおかげだ。
- ⑥ やっぱり、三回宙返りでずっと人間のまま生きていけばよかったのかな。
- ⑦ サーカスの中の人々や団長さんたちが、すごく遠くに見えたから寂しい。
- ⑧ 四回宙返りが出来たら死んでもいいと思っていたけれど、人間でなくなるのがこんなに悲しいなんて思わなかった。
- ⑨ 人気にこだわった生き方にもう疲れた。
- ⑩ ①, ⑤, ⑦②については、根拠のない、想像的見解であろう。

〈発問67〉あなた方は、白い大きな鳥の悲しみに対して、何と言ってやればよいと思うか。

〈発問68〉キキにとっての悲しみとは何を指しているのか。

〈発問69〉キキの生き方、考え方をどう思うか。

→ 感想文、或いはキキへの手紙の形式で表現させる。

参考文献

- 1 メタ童話／メタ反童話，ひとつの童話の起源の物語 中丸宣明
 - 2 都市のフォークロア 高野光男
- 以上 「文学の力×教材の力」中学校篇 2001. 6. 17 教育出版

参考授業実践資料

- 1 平成9年度中学校教育課程研究協議会「国語」実践報告
富士見原中学校 星野健一郎・中澤裕見子・笠井淳各氏 1997.9.19
- 2 三重県総合教育センター 研修講座資料
実践報告 三重大附属中学校 見並貢一氏
- 3 平成21年度亀山市教育研究会国語部会報告資料
亀山市立中部中学校 森ふみ子氏 10月
- 4 伊勢国語研究会発表資料
三重大附属中学校での実践 上野英彦氏
- 5 三重大学教育実習生の附属中学での特別練習授業資料

II 発問摘出（ここでは実際の授業を想定して、全て敬体に直して記述した.）

（I）幸福なキキの不安

- 〈発問1〉サーカスでキキは誰にでもちやほやされ、羨望されている存在であったようですが、そうした人気というものに対して、あなたはどのように考えますか。（想像）
- 〈発問2〉この物語はいつ、どこの話として、誰が語っているのですか。（事実）
- 〈発問3〉いちばん人気とありますが、他の種目はどんな感動を与えていたのでしょうか。（想像）
- 〈発問4〉お客さんは何に対して、どんな気持ちで拍手するのですか。（事実→想像）
- 〈指 示〉サーカス小屋の中の様子について、広さや、音の響き、人の熱気などを想像して、その有様を絵と文章でノートに書こう。
- 〈発問5〉キキの三回宙返りをお客さんはどのように受け止めているのですか。（事実）
- 〈発問6〉観客にとってキキはどのような存在ですか。（事実）
- 〈発問7〉「見るために」という表現から、そのサーカスに於けるキキの立場や役割について述べなさい。（事実→想像）
- 〈発問8〉キキの幸福の根拠は何によるのですか。（事実）

- 〈指 示〉サーカスの人たちの生活について調べておこう。
- 〈発問9〉キキにとって団長はどのような存在ですか。(事実)
- 〈発問10〉なぜ、11「いつか、だれかがやりますよ」といった発言ができるのですか。(事実→想像)
- 〈発問11〉14の団長のことばは本当にそう思っているのですか。(事実→想像)
- 〈発問12〉団長の意図から、団長の性格はどのようなものだと考えられますか。(想像)
- 〈発問13〉キキはなぜ「頑張ってみます」と言わなかったのでしょうか。(想像)
- 〈発問14〉四回宙返りについて、キキと団長はどう考えているのですか。(事実)
- 〈発問15〉団長の言葉をキキはどう受け止めているのですか。(事実)
- 〈発問16〉キキの幸福の根拠は、他のブランコ乗りの幸福と比べたとき、どう違うと思われますか。(想像)
- 〈発問17〉……は何を表しているのでしょうか。(事実)

(Ⅱ) キキとロロの会話とキキの苦しみ

- 〈発問18〉キキはどんな気持ちで練習に取り組んでいたのでしょうか。(事実)
- 〈発問19〉キキは、父の死をどのように受け止めたのでしょうか。(想像)
- 〈発問20〉なぜロロはキキに四回宙返りをやめろと言ったのですか。(事実)
- 〈指 示〉常体で会話している二人の口調等を参考にして、ロロとキキとの年齢差、体型などそれぞれ二人の特徴を比較して、イメージを持ちましょう。
- 〈発問21〉「私の人気は落ちてしまうよ。」とありますが、落ちたらどうなるのでしょうか。(想像)
- 〈発問22〉「落ちる」を詳しく説明してください。(事実)
- 「人気落ちる」と「ブランコから落ちる」とどう違うのですか。—
- 〈発問23〉キキがなる・なれるはずもないピエロに、ロロはなぜ「なれ」と言ったのでしょうか。(事実→想像)
- 〈指 示〉ロロはなぜ、キキのことばが理解できないのか、想像しよう。(想像)
- かつて空中ブランコ乗りに憧れ、失敗した経験があるかもしれない、ロロの辿ってきた人生と、そこから生まれた価値観とをつなげるこ

とで、ロロのことはの深さに思いをさせ、その人生観について考えてみよう。—

〈発問24〉「死んだほうがいい…」とありますが、本文中のどこからこの考えにたどり着いたと考えられるのでしょうか。また、キキは本当に心からそう思っているのですか。(事実→想像)

〈発問25〉ロロの生き方を否定していることにキキは気づいていないようですが、なぜですか。(想像)

〈発問26〉なぜキキの悩みは解決しなかったのでしょうか。(事実)

〈発問27〉キキとロロはそれぞれ相手の考え方についてどう思っていますか。(事実→想像)

〈発問28〉ロロの考え方は、どういう体験から生まれたと考えられますか。(事実)

〈発問29〉キキはロロの仕事をどのように考えていましたか。(事実→想像)

〈指 示〉キキとロロの会話の中で、四回宙返り、人気に対するそれぞれの考え方について比較しましょう。(事実→想像)

(Ⅲ) 四回宙返りを決意するキキ

〈発問30〉主体的に生きるとはどういうことか、二人を比較することによって考えよう。(想像)

〈発問31〉やせたおばあさんの「やせた」から何を連想しますか。(事実→想像)

〈発問32〉シャボン玉から思い浮かべる意味はどんなものですか。(想像→象徴性)

〈発問33〉初め楽しそうだったキキの気持ちは、どのように変わったのですか。(事実)

〈発問34〉キキはどんな気持ちで「おいしいことをしましたね」といったのでしょうか。(事実→想像)

〈発問35〉おばあさんとキキとはどんな関係ですか。(事実)

〈発問36〉……の意味に含まれているものを考えよう。(事実→想像)

〈発問37〉シャボン玉や電気は何を表現しているのでしょうか。(事実→象徴性)

- 〈発問38〉おばあさんはキキをどんな気持ちにさせたのですか。(事実)
また、キキの気持ちを動かしたことはどれでしょう。(事実)
- 〈指 示〉キキが落ちたときの姿を想像しよう。(想像)
- 〈発問39〉おばあさんは人気や評判をどのように考えているのでしょうか。(事実)
- 〈発問40〉おばあさんはどういう考えでキキと話をしていたのですか。(事実)
- 〈発問41〉48「そうですか…。」の「……」は何を意味しているのですか。(事実→想像)
- 〈発問42〉おばあさんはどんな人ですか。(事実)
- 〈発問43〉52「そうですね…。」の「……」の意味は何でしょう。(事実→想像)
- 〈発問44〉54「～二人しかいないんですよ。」でのキキの意図を述べましょう。(事実)
- 〈発問45〉自慢げに言っていたキキの心がなぜ落ち込んでしまったのか説明しよう。(事実)
- 〈発問46〉海の方を見たのは、どんな意図によるのですか。(事実)
- 〈発問47〉57「～そのままゆっくり歩き始めました。」の時のキキの心について説明しましょう。(事実)
- 〈発問48〉決して死を望んでいるわけではないのに、四回宙返りを決意したキキの気持ちはどうなのだろう。死を恐れる気持ちを抱き、迷いながらも四回宙返りを決意していかざるを得ないキキの気持ちはどんなでしょう。(事実→想像)
- 〈発問49〉四回宙返りを決意した気持ちを述べましょう。(事実)
- 〈発問50〉「それで終わりさ」の「終わり」は何を意味しているのでしょうか。(事実)
- 〈発問51〉葉を渡したおばあさんの意図は何でしょう。(事実)
- 〈発問52〉おばあさんはこのとき、どんな気持ちをキキに対して持ったのでしょうか。(事実→想像)

(Ⅳ) 四回宙返りをするキキ

- 〈発問53〉看板を見た後、なぜ「ピピのことを口にするものはだれもいなくな」
ったのでしょうか。(事実)
- 〈発問54〉「までが」に込められた団長さんの人柄を考えましょう。(事実)
- 〈発問55〉お客さんに見えた白い魂とは何を象徴していると考えますか。(事
実→想像)
- 〈発問56〉暗闇に乗り出す前のキキはどんな様子だったのでしょうか。(事実)
- 〈発問57〉なぜ「見ててください」とキキはつぶやいたのでしょうか。(事実)
- 〈発問58〉この世界とは、キキにとっては何なのでしょう。(事実)
- 〈発問59〉なぜキキはおばあさんが見ているか、とひとりごとを言ったのでし
ょう。(事実)
- 〈発問60〉86「～どこかで見ているのかな…」での「……」の意味は何でしょ
う。(事実→想像)
- 〈発問61〉「真っ暗な天井の奥」からどんなことを思い描きますか。(想像)
- 〈発問62〉「いました」と「いきました」とは、どう違うのでしょうか。(事実)
- 〈発問63〉宙返りを終えた96の後、観客の反応はキキにとってどうだったので
しょう。(事実)
- 〈発問64〉「悲しそうに鳴きながら」とは、どんな鳴き方、鳴き声、様子でしょ
う。(想像)
- 〈発問65〉町の人はずいぶん大きな鳥をキキだとうわさし合ったのでしょうか。
(事実)
- 〈発問66〉もし、大きな鳥がキキだったとしたら、心の中はどんなだったのだ
しょう。(事実→想像)
- 〈発問67〉あなた方は、白い大きな鳥の悲しみに対して、何と言ってやればよ
いと思いますか。(想像)
- 〈発問68〉キキにとっての悲しみは何を指しているのでしょうか。(事実)
- 〈発問69〉キキの生き方、考え方をどう思いますか。(想像)

発問の末に、() で記したような分類は、凡その見解であり、相互に入れ替わり、他の要素の加減も思慮の対象となるが、ここで明らかなことは、如何に想像の力に頼る部分の多量・多義に渡っているかである。これは、伝聞、おとぎ話風というジャンルの持っている性格からくるものである故の仕儀であるが、それだからこそ、登場人物の行動や心情の必然性をどう構築するかが、大きな問題となるのである。

Ⅲ 「生徒に期待できるもの」への見解

人気、評判への渦中に埋没することで、キキが見失っていたものは、他の人間との関わりの中に生きること、即ち、人間の社会的存在としての存在証明であった。人間は、他人からの毀誉褒貶のためにのみ存在しているのではない。彼岸に世評があり、此岸に自分が立つのではない。この二つはともに混交しながら己を築いていくのが人間なのである。人が成長するとは、この混交した世界の中で生きていく力を獲得する過程を意味するものであるとするなら、キキは、全く成長しきれない未成年である。キキの悲劇は、己と世評の二極を対峙させて、その中間に揺れ動きながら、ついには、どちらの居場所もなくなってしまったことにある。居場所を求めてさすらい行く白鳥そのものに化身したことは、誠にむべなるかな、と言わざるを得ない。成長しきれなかったキキの中の魅力は、この幼児性のもたらした妖精的形象の中にあるのかもしれない。こうした視点から、次のような読み手への指針が導き出される。

- 人は誰に理解されなくとも、最終的には自分自身でありたいと思うのは、人間の根底に流れている自負というものからである。それがたとえ荒唐無稽な夢のような希求であろうとも、或いはまた、死が待ち受けているものであろうとも。こうして人はついに、その見解のために悲劇を呼び込んでしまうものである。
- ここでの悲劇は自分の生きがいである観客からの拍手と喚声を維持し続けるために、命をかけた、はかなくも切ないキキという少年の生き方を通して顕現される。だが、観客にとって、キキの悲劇はあずかり知らぬ世界である。
- だから、読み手はここで、人気を維持していくことや、死への不安、周り

の人々からの期待というプレッシャーと戦いながら生を全うしていくキキの生き方に対しては、遠慮会釈なく、誰はばかることなく、自分にとって何が存在証明となるのかを真剣に追い求めていかなければならない。そうすることによって、はじめて根性や向上心や主体性とは何なのか、そうしたものが生の充実にどのような力をもたらすのかを考える姿勢に気づくのである。そのとき、この教材のその生徒にとっての意義は明らかになる。そうしたものを何に向けるかを考えさせることが大切である。

結

発問は、教材を読み深めるための授業の核となる営みである。生徒は、「問い」と「答え」の相互関係の中で思考力を養う。そして、その「問い」の質的なレベルの高さは、教材への教師の読みの確かさに比例する。視点を無視した生徒の疑問や、文脈から逸脱した発問に答えが空回りすることのないよう、教材の状況や語りの視点を正確に踏まえて、そうした基盤の上に立った発問を提出しなければならないと考え、「空中ブランコ乗りのキキ」に焦点を当てて、その各場面の解釈に基づいた「発問」の精査を行った結果、作品全体を貫く発問を次の5点に整理・設定できると考えた。

- 1 観客はキキをどんな風に思っていたか。
→ 単なる「サーカスのすごいブランコ乗り」以上でも以下でもない。
- 2 人気がなくなることが、なぜそんなに不安なのか。
→ 自己同一化が崩れ、存在価値がなくなるから。
- 3 ロコの忠告を聞かないキキの理由は何か。
→ 子供の頃からの特殊な限定された育ち、境遇からの影響。
- 4 キキが死を覚悟してまで四回宙返りを試みるのはなぜか。
→ 自己存在証明のため。
- 5 観客が大きな白い鳥をキキとうわさしたのは何に起因していると考えるか。
→ これまでに観客の見た条件のみに限定して考えると、いくつかの比喩への幻覚によってであり、それ以上でも以下でもない。観客は、語

り手でもキキでもおばあさんでもないのであるから。

以上、観客から見たキキへの判断と、その拠ってくるところの理由を考えることで、作品の持つ外側からの象徴的意味をとらえさせたいと考えた。

発問は、読みの方向性を示すものである。したがって、生徒は、いつしか発問によって、己の作品への「問い」を形成する学力を身につけると考えるのである。

このことが、主体的な考える力を養う最も有効な手立てだと考える。

今後、拙文を礎として、新たな解釈、実践の生まれることを期待して、この稿を閉じたいと思う。